

音楽科教育を展望する

—コロナ禍における附属学校の取り組みを通して—

伊野義博, 平出久美子*, 吉村智宏**, 米山陽子***, 和田麻友美****

1 研究の背景と目的

1.1 背景

新型コロナウイルス感染症が学校教育, とりわけ音楽教育に与えた影響は大きい。

2019年度末, 政府より小中高, 特別支援学校に対して一斉休校の要請がなされた。卒業式や入学式において予定されていた合唱や校歌斉唱など, 多くの子供たちが突然仲間と歌う機会を奪われることになった。

2020年3月24日付の文部科学省通知「令和2年度における小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校における教育活動の再開について」では, ①換気の悪い密閉空間にしないための換気の徹底, ②多くの人が手の届く距離に集まらないための配慮, ③近距離での会話や大声での発声をできるだけ控えること, といった三つの条件が指摘され, これらが「同時に重なることを徹底的に回避する対策が不可欠」になった。

3月26日, 東京都は新学期ガイドライン(都立学校版, 感染症予防ガイドライン)を示したが, そこでは「近距離での会話をなるべく避ける」「年間授業計画を見直し, 指導の順序等を変更する等の工夫」が求められ, 音楽の授業では「歌唱の活動や管楽器(リコーダー等)を用いる活動は行わない」といった事柄が明記されている。新潟市のガイドラインでは, 年間予定の見直しの中で「『身体接触』, 『密閉した空間での発声』『学級を超えてのかかわり』を伴う教育活動の実施時期, 実施方法を検討する」ことが示され, 音楽科の場合「4月は鑑賞を中心に実施, 換気を十分にしながら歌う, 屋外で歌う」などの例示を伴っている(新潟市教育委員会, 2020.3.27)。教室や音楽室での合唱や合奏の活動はそれまでの学校の日常であり, 言わば「当たり前」のこととして存在していた。しかしこの「当たり前」が認められず, このことに学校の音楽授業は大きな衝撃を受けた。個々の学校において, 具体的かつ緊急の対策が求められた。

事態は好転することなく, 4月7日には, 改正新型インフルエンザ等対策特別措置法に基づき, 東京都や大阪府など7都道府県に緊急事態宣言が出されることとなる。そして, 児童生徒の感染予防のため, 全国の小中学校等に臨時休校の要請がなされた。文部科学省によると, 4月22日時点で全国の国公私立学校の91%, 同日以降の予定も含めると94%もの学校が休校または休校予定となった(2020年4月24日, 日経電子版)。学校に登校することができなく, 家庭学習を余儀なくされた子供たちの学習指導をどのように支援するかが喫緊の課題として浮上する。

このことについて, 文部科学省は, 4月10日付通知「新型コロナウイルス感染症対策のための臨時休校等に伴い学校に登校できない児童生徒の学習指導等について」において, 基本的な考えを示した。本通知では, 学校に対して指導計画を踏まえた適切な学習を課すことが求められるとともに, 教科書と併用できる教材, 動画等を活用した学習の組合せ, ICT教材や動画, インターネットを活用した調べ学習, オンライン指導の例が示されている。同時に, 「子供の学び応援サイト」が作成され, webサイトやリンク集等, 自宅学習用のコンテンツが多数紹介された。これらに呼応するように県や市の教育委員会では, 独自の動画コンテ

2020.10.26 受理

* 新潟大学附属長岡小学校 ** 新潟大学附属長岡中学校

*** 新潟大学附属新潟小学校 **** 新潟大学附属新潟中学校

ソングの作成に取り組んだり、課題を例示したりしている。新潟市の場合、休校中の音楽科の課題として「教科書の曲について、家の人からきいたり、インターネットで調べたりして自分でも歌ってみよう」「題名からどんな曲かノートに一行でいいから予想を書いてから聴いてみよう。どんな曲だったかノートに家の人や先生に紹介する文を書こう。紹介しながら一緒に聴こう」(5, 6年生)、「声を出すことが可能な環境がある場合は、今まで学習した曲や任意の曲を選択し、楽譜を見ながら口ずさんだり、暗唱したりして、曲のイメージを膨らませたりしながら、曲想や感想などをノートにまとめてみよう」(中学校)などの例が提示された。

その後文部科学省は新型コロナウイルス感染症については、「長期的な対応が見込まれる状況」と判断し、「3つの密」を徹底的に避ける、「マスクの着用」および「手洗いなどの手指衛生」など基本的な感染対策を継続する「新しい様式」を導入し、教育活動の継続、子供の健やかな学びの保障の必要性を述べている。その中で、音楽における「室内で児童生徒が近距離で行う合唱及びリコーダーや鍵盤ハーモニカ等の管楽器演奏」は「感染症対策を講じてもおお感染のリスクが高い学習活動」のうち「特にリスクの高いもの」と判断されている(文部科学省, 2020.5.)。今後「学校の新しい様式」の中で、音楽授業や音楽活動をどのようにしていけばいいのか、大きな課題となっている。

1.2 大学と連携した附属学校の取組

こうした状況下の3月、新学期を前にして、感染の阻止や子供の命を守ることを最優先しつつ、学校における音楽活動、音楽授業をどのように実施していけばいいのか、子供たちの音楽活動をどう保障していけばいいのか、について考えることが音楽科教育担当者にとって急務であった。中でも国の拠点校、地域のモデル校としての附属学校の役割、大学との連携における教育研究や教育実習校としての附属学校の役割を考えれば、附属学校や大学はこの課題に早急に取り組む必要があった。筆者等は上越教育大学とも連携し、この課題に取り組むチームを編成した。このチームには、結果的に新潟大学附属学校5校(附属新潟小学校、附属長岡小学校、附属新潟中学校、附属長岡中学校、附属特別支援学校)の音楽科担当教諭5名と新潟大学教育学部・大学院教育実践学研究科の音楽教育担当教員2名及び上越教育大学附属小中学校の音楽担当教諭2名及び上越教育大学音楽教員担当教員1名が参集した。

我々につきつけられた課題は直接的には「学校において、3条件の重なりを回避する音楽活動、音楽授業をどのように考え、どのように実施すればいいのか、授業の活動や授業の具体的なプランは何か」ということ、その際の前提として、子供が楽しく音楽活動をすること、音楽科の資質・能力が育成されること、ということがあげられた。しかし間接的には、この作業を通して、音楽をすること、教えること、が再吟味され、これまでの音楽授業を捉え直し、未来につながる持続可能な音楽科のあり方を展望するといった前向きな思考法と方法論を獲得することだと考えた。

第1回目の会議は、2020年3月31日、Web会議ツールZoomを利用して行われ、以下の内容が検討された。

- ① 3月に何がおこったか(休校による授業の中止、卒業関係の歌の活動、卒業式のやり方の変更による音楽活動の中止や変化、声や音によるコミュニケーションの変化等々)
- ② 4月以降、学校再開の場合、3条件の重なりを回避しつつ音楽授業を実施するにはどうしたら良いか
 - ・ 行事实施計画
 - ・ 授業実地計画(ex. 音楽の授業を当面無くす? or 確保? 授業の場所、環境づくり)
 - ・ カリキュラム
- ③ 4月以降、学校が再会されない場合、音楽授業をどのように実施するか(遠隔システム、プログラミング学習)
 - ・ 持続可能な音楽活動や授業のあり方について
 - ・ その他

その後会を重ね、考えなければならないこと、やるべきことを次の3点に絞り、具体的な授業プラン作成を持ち寄り検討した。

- ① 休業中の子供たちにどのような課題を出したら良いか
- ② 3つの密(密接, 密集, 密閉)を避ける授業はどのようにしたら良いか
- ③ 遠隔システムによる授業のやり方にはどのようなものがあるか

5月13日、これらのプランは、一旦集約され、各附属学校ホームページをはじめ、様々な形で全国に発

信された(資料1)。一例として、日本音楽教育学会ホームページ「新型コロナウイルス感染症 音楽教育に関わる情報」ウェブサイト(<https://info.onkyou.com>)で閲覧可能となっている(2020.10.26現在)。

これに続く8日8日(土)、オンラインで開催された新潟大学教職大学院主催による「にいがた教育フォーラム」では、本稿執筆者の5名による「音楽科教育の展望～コロナ禍における附属学校の取組を通して～」と題したワークショップを企画した。

このように様々な対策を考え実践することは、これまでの音楽科教育を振り返るきっかけとなった。しかしそれ以上に重要なのは、今回問われているのは、これまでの学校の音楽授業、音楽教育のあり方そのものであり、その問いに対する考察を通して未来の音楽教育を展望することであるという我々の気付きであった。

1.3 本稿のねらい

以上の背景のもと、本稿では、主として「にいがた教育フォーラム」におけるワークショップの発表内容に焦点をあて、新型コロナウイルス感染症禍において、①各附属学校でどのような取組・実践を行ったかについて、学校の状況や実践者の実践意図とともに具体的に紹介し、②個々の実践の意味や課題について考察することを通して、③音楽科教育において「何が問われたのか」について検討し、そこから音楽教育の今後を展望する。

(伊野)

2 コロナウイルス感染症禍における各校音楽科の取組

2.1 「つながれ音楽の力 オンライン学習をデザインしよう！」(附属新潟小学校)

2.1.1 実践の背景と意図～コロナ禍の学校～

新型コロナウイルスは、これまで学校に当たり前にあった音楽授業の在り方を一変させた。感染を阻止し、子供たちの命を守ることを最優先するため、歌唱におけるマスクの着用、一方向での発声、常時活動における身体接触の制限、グループ活動は距離を保ち短時間で行うことなどが求められた。これまでの音楽授業の中で、歌うことができない、友達と協働して音楽を楽しむことができない時が来ることを誰が予想できたであろうか。子供たちのいない休校中の音楽室を見渡し、音楽科としての学びが成立するのか不安な日々であった。

このような状況下でも、児童生徒を複数のグループに分けた上で、それぞれが限られた時間、日において登校する分散登校に入ると、子供たちは、久しぶりに友達と会えた喜びを身体いっぱい表現していた。会えない友達には、黒板にメッセージを残し「今日は、いろいろな楽器を試して合奏の分担を決めたよ。みんなで合奏できる日が来るといいね」「みんなで歌いたい歌を黒板に書いたよ」などと、音楽を通じて友達とつながろうとする姿が見られた。今まで当たり前だった「みんなで学ぶ」ことが、どれほど私たちにとって大切な時間であり、価値のあることなのかに気付く瞬間でもあった。

そこで、1学期の音楽授業は「音や音楽でつながる」をテーマに授業研究を進めることとした。これは新しいことではなく、これまで音楽科が大切にしてきた学び方をアレンジしたり新たに探ったりしていくことで、コロナ禍の学校において持続可能な音楽科の在り方を考える試みである。そこでの課題は、「学校において、密閉、密集、密接のいわゆる3密の状態を回避する安全な音楽授業をどのように考え、実施するのか」ということと、「学校に登校できない場合に、どのように音楽学習を保障し、具体的に実践していくのか」の2点である。特に2点目については、「教科書の曲についての調べ学習」「鑑賞教材を聴き、感想を書く」といった課題が、本当に子供たちにとって必要なのか、さらには自立した学び手を育てているのかという視点を私たち教師が忘れてはならない。今回の学習指導要領改訂では「音楽的な見方・考え方」を中核とした学びの重要性が示されている。「自分事として題材を捉える」「様々な感覚を通じて感じたことを表現する」「学びを更新する」という学び方のサイクルを繰り返すことで、音楽科のねらいである「生活や社会の中の音楽と豊かに関わる力」を育成することが求められている。このような状況下にあっても、目の前の子供たちのために、持続可能な音楽科の学びをデザインする力が求められているのである。

2.1.2 実践

国のGIGAスクール構想が急速に進み、タブレット端末を活用した授業づくりに向けて準備が進んでいる。ここでは、休校中の実践においてどのようにオンライン学習を取り入れたのかを示す。今回のオンライン学

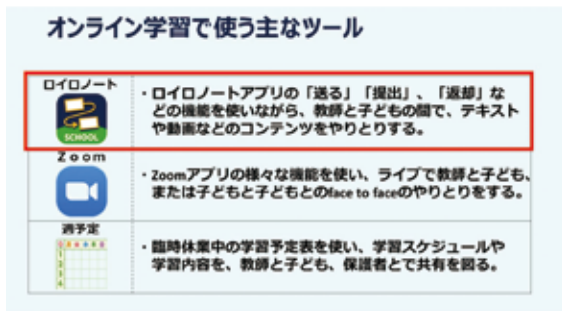


図1：オンライン学習で使う主なツール

教材曲は長谷川匡俊作曲の「クラッピングファンタジー第4番」を選んだ。リズムの反復や変化を感じ取りやすく、友達とリズムを重ねたりボディー・パークッションを入れたりして即興的な表現を楽しむことができるという特徴がある。学校での学習では2つのパートに分かれ、リズム打ちを楽しんだ。その後、家庭で取り組むことのできる課題を作成した。ここでは、学習のねらいを①拍にのってリズムをたたくことができる②イメージをもとにして、8拍分のリズムをつくることのできるという2つに設定した(図2)。

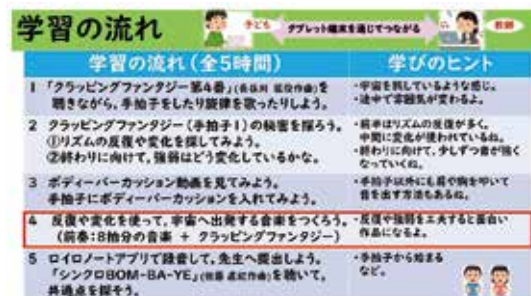


図2 学習の流れ

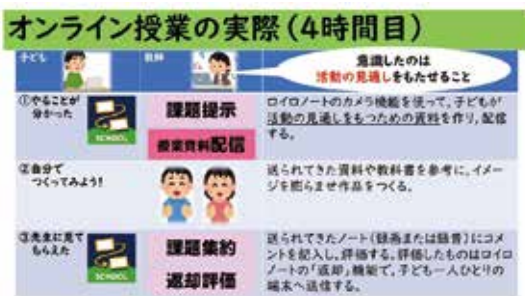


図3 オンライン授業の実際

1) オンライン授業の実際(4時間目)

まず、ロイロノートのカメラ機能を使って、子供が活動の見通しをもつための資料を作成し、個々のタブレット端末に配信した。具体的には、「クラッピングファンタジー第4番に前奏を付けてみよう」と提案した。宇宙のイメージを膨らませるために数枚の画像を送り、教師が創作した8拍分のリズムはどんな様子を表しているかというクイズを出した。子供は、聴き取ったリズムや強弱と画像のイメージとを結びつけて画像を選択し、自分も手拍子で表したい音楽がつくれそうだと見通しをもった(図2, 3, 4)。



図4 活動の見通しをもたせるためのポイント

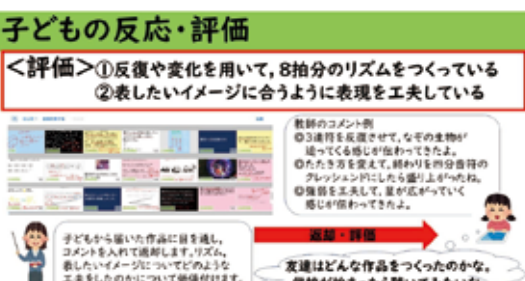


図5 子供の反応・評価

次に、音楽づくりの条件を提示した。8拍分の前奏をつくること、表したいイメージは自分で決めてよいことを伝えた。音楽をつくり終えたら演奏を録音し、ロイロノートの提出ボックスへ送ることとした。子供

は、表したいイメージの画像を検索してリズム譜をつくったり、ボディー・パーカッションの方法を多様に試したりと創造性を発揮しながらオリジナリティーにあふれた作品を提出した(図5)。

子供から届いた作品に目を通し、コメントを入れて返却した。表したいイメージについて、音楽を形づくっている要素をどのように工夫をしたのかについて価値付け、双方向のやりとりを行うためである。「3連符を反復させていましたね。謎の生物が迫ってくる感じが伝わってきました」などとコメントを書いて返却し、子供たちの工夫を価値付けることができた(図5)。

2.2.2.2 実践2：第6学年「いろいろな音色を感じ取ろう ～ハーモニー研究所～」(器楽・鑑賞)

オンライン指導と対面指導を組み合わせ、学びを深めることをねらった実践である。

教材曲は「ラバースコンチェルト(デニーランデル・サンデーリンザー作曲)」と「メヌエット(ペツォルト作曲)」。「木星(ホルスト作曲)」を選んだ。ここでは学習のねらいを①パートの役割や楽器の音色の特徴を生かして合奏できる②オーケストラの響きを味わいながら聴くことができるという2つに設定した。まず、学校でなければできないことと家庭でも学びを深めることができる内容とに分け、オンラインと対面学習を組み合わせた学習計画を構想した(図6、図7)。

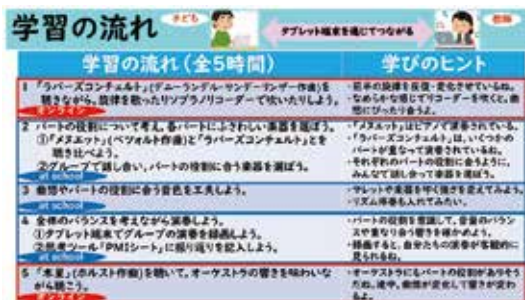


図6 学習の流れ



図7 オンライン授業の実際

1) オンライン授業の実際(1時間目)

まず、課題を把握し知識を獲得することをねらい、ロイロノートのカメラ機能を使って、子供が活動の見通しをもつための資料をつくり配信した。子供は、送られてきた動画資料(教師の模範演奏)や教科書を参考に、全体の構成を理解し、旋律の特徴を感じながらリコーダーを演奏した。家庭学習における子供の技能を把握し、躓きにに応じたアドバイスをするため、送られてきた録音動画にコメントを入れ返却した。学校の授業内では個別に全員の演奏を聴き、アドバイスをすることは時間の都合上難しい。しかし、提出された動画を確認することで、個々の子供の実態が把握でき「フレーズ感が出ていて、歌うように吹けているよ」「シのフラットの指使いをもう一度確認しよう」などと具体的な支援ができた(図7)。

2) 学校での授業の実際(2時間目)

「メヌエット」と「ラバースコンチェルト」を聴き比べ、雰囲気の違いを醸し出す要素は何かを考えさせた。子供は「メヌエットはピアノで演奏されている」「ラバースコンチェルトは、いくつかのパートが重なって演奏されている」などと気づき、楽譜を確認しながらそれぞれのパートの役割を理解した。その後、それぞれのパートの役割に合うように話し合っ、楽器を選び、パート譜にはないリズム伴奏をつくったり各パートの音を重ねたりしながら合奏を楽しんだ。休校中に親しんだりリコーダーの旋律に音が重なる喜びを感じ、友達と何度も合奏をする姿が見られた(図8)。

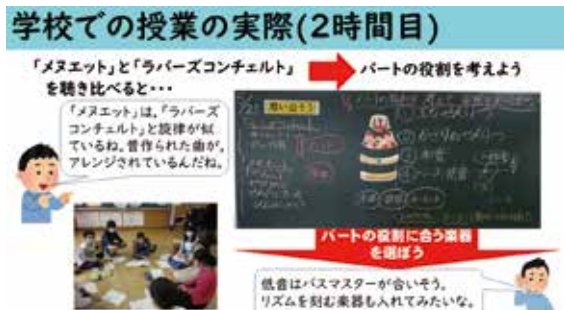


図8 学校での授業の実際

演奏されている」などと気づき、楽譜を確認しながらそれぞれのパートの役割を理解した。その後、それぞれのパートの役割に合うように話し合っ、楽器を選び、パート譜にはないリズム伴奏をつくったり各パートの音を重ねたりしながら合奏を楽しんだ。休校中に親しんだりリコーダーの旋律に音が重なる喜びを感じ、友達と何度も合奏をする姿が見られた(図8)。

3) 評価の実際(4時間目)

学校でグループごとに演奏を撮影し、ロイロノートで動画を配信した。自分たちの演奏を客観



図9 子供の反応と評価

的に分析し、各パートの音の重なりやバランスを確認させるためである。子供は、自分たちの演奏を聴いて感じたことをロイロノート上の思考ツール（PMIシート）に打ち込み提出した。PMIとは、あるテーマについて考える際「良いところ」「改善点」「面白いところ」は何かを整理するための思考ツールである。子供たちはグループの演奏をロイロノートで視聴し、パートの役割や楽器の音色の特徴を生かして、演奏の仕方を工夫したことが実感できたという記述が多く見られた。

2.1.3 考察

今回のオンライン学習で大切にしたい子供の「学びの要素」は以下の通りである（図10）。

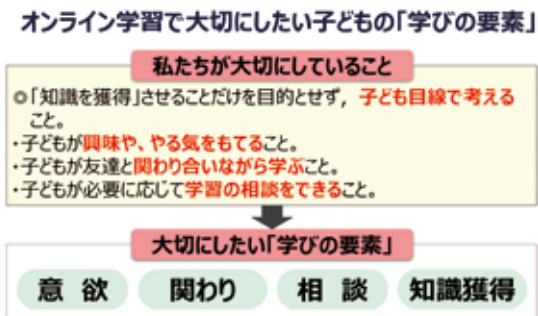


図10 オンライン学習で大切にしたい「学びの要素」

これから急速に進むであろうGIGAスクール構想においては、次の視点が重要になってくる。

・オンライン学習と対面学習のよさを生かして組み合わせること

「ICT活用」が目的ではなく、ICTはあくまで学びを深めるためのツール(手段)であることを忘れてはならない。思考ツール、アプリなどを通して「つきたい力は何か」を念頭に授業を行うことが大切である。また今回のコロナ禍の状況は、「共にその場にいる」「みんなで学ぶ」ことが、どれほど私たちにとって大切な時間であるかに気付く瞬間でもあった。友達と共に学ぶことの価値、

音や音楽でつながる価値を大切に授業づくりを進めていきたい。

・子供たちの音楽的自立を念頭に授業を行っていくこと

日々の授業の中で技能を重視するあまり、リコーダーができること、合唱をすることが第一主義になっていなかったか。子供は何を身に付けるかという視点で「つきたい力は何か」を日々の授業でも追求してきたか、今一度考える必要がある。今回のような状況下において学習形態が今までと変わっても、音楽科が目指す本質的な部分は変わらない。音楽を通して人・もの・こととつながる子供の姿を目指して実践を続けていく。

(米山)

2.2 子供が夢中で取り組む楽しくて深い学びを実現する音楽授業づくり（附属長岡小学校）

2.2.1 実践の背景と意図

コロナ禍において、音楽科の主要な活動ともいわれる、歌うことや吹くこと、仲間と触れ合いながら音楽でコミュニケーションをとる活動が、感染リスクの高い活動と示されたことは、音楽を担当する教師を困惑させた。多くの規制がある音楽授業の実際を、現職の教員に聞き取り調査をしたところ、「音楽の授業は実施せず、主要教科の時数を確保している。」「鑑賞を中心に実施している。」「先生方がどのように授業をしたらよいか困っている。」等の声が聞かれた。歌わない、吹かない、仲間とかかわらずに音楽を聴く活動を展開する。このような危険回避の授業では、コロナ禍に、音楽嫌いな子供が増えてしまうことが危惧される。多くの制限があるコロナ禍でこそ、子供たちの学習意欲を高め、深い学びを実現する音楽授業を実践したい

と願い、新たな視点で授業を探索した。深い学びを実現する授業とは、単に知識を習得したり技能を高めたことではなく、音楽的な見方・考え方を働かせ、既習の知識、技能、生活経験と関連付け、学んだことを自身の音楽や生活に活用する力を付ける授業と捉えている。

学習指導要領で示されている、子供たちに身に付けさせたい資質・能力を育むため、これまでの固定観念を覆し、発想の転換が必要になってくる。コロナ禍の規制に対応しつつ、子供たちの学習意欲を高め、深い学びの実現を目指した授業を探索した。

2.2.2 実践

2.2.2.1 実践1 第4学年「100年の森の素敵な音をつくろうーサウンドスケープを生かした音楽づくりー」

1) 対象

新潟大学附属長岡小学校 4年1組, 4年2組

2) 題材の目標

100年の森のイメージに合う音楽のつくり方を考える中で、音色や奏法、音の重ね方を工夫するとイメージが変わることに気づき、仲間と音を重ねて音楽をつくることができる。

3) 題材について

本題材では、校庭にある100年の森で「サウンドスケープ」を生かした音楽づくりをする。「サウンドスケープ」とは、カナダのマリー・シェーファーが考案した概念（R.マリー・シェーファー 1986）で、「音風景」「音景」と言われる。①音探し②音マップづくり③音楽づくりへと発展させ、音環境に興味をもち、生活や社会の音や音楽と豊かに関わることができる題材である。「附属100年の森」を音楽活動の舞台とすることで、音環境に関心をもち、音楽と自分の生活とを関連付けた学びが実現するのではないかと考え、実践に至った。

4) 題材計画（全6時間）

表1 学習計画（全6時間）

時	○学習内容	指導上の留意点
1	○耳を澄まして、身の回りの音を聴いてみよう。	・ 自然・人間・機械の音に分類する。
2	○みんなが見つけた音を集めて、音マップをつくろう。	・ 100年の森の拡大図に、自然・人間・機械の3色に色分けした付箋を貼り付ける。
3	○100年の森のイメージに合う音をつくるにはどうしたらよいか。	・ イメージと、楽器の音色、仲間の音と自分の音とを比較・関連付ける。 ・ 3部屋に分かれて、密を防ぐ。
4	○よりイメージに近づけるために、音の組み合わせを考えよう。	・ 反復や呼びかけと答えを生かしたりして、音を音楽に構成する。 ・ 屋外または、部屋を分けて密を防ぐ。
5	○みんなの音を集めて、100年の森をつくろう。	・ グループの音のつなげ方、重ね方を意識して音楽を構成する。
6	○100年の森で、音のコンサートをしよう。	・ 100年の森（屋外）で互いの音に耳を澄ませて演奏する。

5) 授業の実際

題材の導入では、普段子供たちが遊んでいる100年の森の写真を提示し、どんな音が聴こえてきそうか想像させた。すると、風の音や葉っぱの音などの自然の音だけでなく、子供たちが遊ぶ声など人間が出す音、車などが出す機会の音があることに気付いていった（図1）。日常生活音を想像した子供たちは、実際に100年の森に行って音を聴いて確かめたいと意欲を高めた。そこで、100年の森に出向いて音探しをする場を設定した。一人一人が自分の音マップに聴こえた音を書き留め、整理していった（写真1, 2）。

100年の森の音に興味をもった子供たちは、自分たちで楽器や声を生かして100年の森の音をつくりたいと意欲を高めた。そこで、100年の森をイメージした音楽をつくる活動を組織した。楽器や声でイメージする音をつくると、同じ音をつくっている仲間が集まり、まとまりのある音楽をつくり、さらにそれぞれのグループの音をつなげて、学級全体で100年の森の音をつくりたいと意欲を高めた。自分たちがイメージする



図1 子供たちの音の想像



写真1 森で音を聴く



写真2 聴こえた音の整理

音や音楽を構成し、互いの音楽を聴き合い、楽器や奏法、声の出し方を工夫しながら、イメージに合う音楽をつくっていった(図2)。森のコンサートでは、他のクラスの子供や校庭で遊んでいる幼稚園の子供たちも耳を澄ませた。演奏後は歓声を上げながら満面の笑みを浮かべ、拍手をし合う子供たちの姿が見られた(写真3)。



図2 つくりだした音楽の記録



写真3 森の音楽会

屋外で自然の音に耳を澄ませるという体験は、音を聴き分ける耳を育てること、自然が醸し出す拍のない音楽の美しさを実感することに有効であった。森の音楽づくりでは、生活の中から音を探して、自ら手づくり楽器をつくるなど、生活と音楽とを関連付けること、音色や奏法によるイメージの変化への気づきに有効であった。子供たちからは、「こんなにも自然の音が美しいとは思っていなかった。」「改めて音楽の素晴らしさを実感した。」「家でも音を見付けた。」等、サウンドスケープ後の目の輝き、音への興味関心や音作りへの意欲の高まりを目の当たりにすることができた。音環境に興味をもち、生活と音楽をつなぐ、音楽科にとって最も重要な学びができたと考える。これは、感染対策の授業としてではなく、コロナに関係なく、今後も継続して実践をしていく価値のある題材であると考えられる。屋外で音楽授業をする際、場所を変えて実施すればよいのではなく、その場から何を学ぶことができるかを視野に入れて授業をつくることが重要である。

2.2.2.2 実践2 第5学年「和音の音で旋律をつくろう—Chrome Music Labを活用した旋律づくり—」

1) 対象

新潟大学附属長岡小学校 5年1組, 5年2組

2) 題材の目標

和音と旋律とを関わらせて音楽をつくる音の組み合わせを考えながら旋律をつくる中で、和音の組み合わせやリズムを工夫すると、まとまりのある旋律になることに気づき、思いを生かして旋律をつくることができる。

3) 題材について

本題材では、I—IV—V—Iの和音の音を活用した音楽づくりをする。使用する教材は、「Chrome Music Lab」の「Song Maker」を活用する。「Chrome Music Lab」は、Googleが開発した音楽教育Webアプリである。「Song Maker」は、クリックした階名の音が出る仕組みで、和音の音を自分でつくって響きを聴いたり、イメージに合う旋律をつくったり、音を音楽に構成したりすることが容易にできる。鍵盤ハーモニカ等の演奏技能

に左右されることなく、全ての児童がイメージと和音の音を関連付けて音楽をつくることができる教材である。子供たちが日頃から慣れ親しんでいる ICT を授業に導入することで、自分の音楽や仲間がつくる旋律に関心をもちながら、音楽をつくる姿を期待した。

4) 題材計画 (全5時間)

表2 学習計画 (全5時間)

時	○学習内容	指導上の留意点
1	○「Song Maker」で音楽をつくってみよう。	・即興で音とつくる楽しさを味わわせ、和音の音楽づくりへとつなぐ。
2	○「Song Maker」で I - IV - V - I の和音をつくろう。	・ I - IV - V - I の和音に合わせて、「茶色の小びん」の旋律を聴かせ、旋律づくりへの意欲を高める。
3	○ I - IV - V - I の和音の音を使ってイメージに合う4小節の旋律をつくろう。	・3種類の旋律を比較聴取し、旋律による雰囲気の違いを感じ取らせる。
4	○飾りの旋律や打楽器を入れて、よりイメージに合う音楽にしよう。	・主旋律と打楽器の音色、飾りの旋律、速度とのバランスを聴き合う。
5	○つくった音楽を聴き合おう。	・互いの音楽のよさを聴き合い、イメージと音楽を形づくっている要素とを関連付けて感想を伝え合う。

5) 授業の実際

題材の導入で、教科書を活用し、I・IV・Vの和音について学習し、教師がピアノで和音を弾いて音の重なりを聴いた。子供たちも、自分でも和音を弾いてみたいと意欲を高めた。そこで、「Song Maker」を活用し、和音の音を自分たちでつくって聴く場を設定した。次に、教科書に掲載されているI—IV—V—Iの和音をつくり、音を反復させて聴くと、子供たちは、曲のようになっていることに気付いた。子供たちがつくった和音に、「茶色の小びん」の旋律を重ねると、「そういうことか!」という声が聞かれ、和音と旋律とが重なって音楽になっていることを実感していった。その際、一つパソコンから出る音と、キーボードから聴こえる旋律を、全員で耳を澄ませて聴くことで、仲間と気付きを共有できた(図3, 4)。



図3 創作場面



図4 Song Makerの画面

自分たちも和音の音を使って音楽をつくりたいと意欲が高めてきた子供たちに、分散登校中に「家で○○をしている時に聴きたい曲」をつくる活動を組織した。イメージマップで、つくりたい音楽のイメージを広げた。主旋律をつくる際、旋律の動きによる雰囲気の違いを感じ取らせる為、「Song Maker」の画面と同じワークシートを活用し、つくった音や旋律を記録し、旋律の動きを可視化した。自ら仲間の旋律を聴きに行く子供も多く、ICTを活用しながらも、仲間とかかわろうとする姿が見られた。全体で主旋律を聴き合う活動を組織すると、旋律の動きによってイメージが変わることに気付いていった。さらに、自分のイメージする音楽に近づけるため、飾りの旋律や打楽器等を入れ、思いを具現していった。自分で試行錯誤したり、仲間の音楽を聴き合ったりする中で、旋律の動きやリズム、和音の重ね方や速度により曲のイメージが全く異なることに気付いていった(図5, 6)。

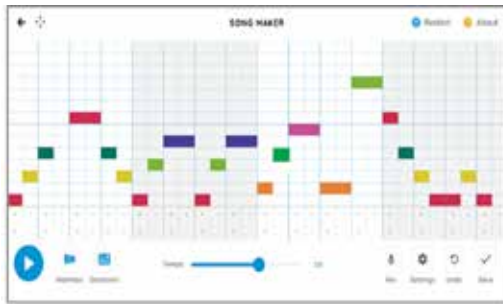


図5 創作過程例1

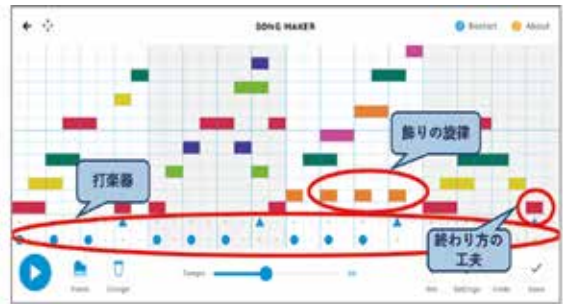


図6 創作過程例2

本実践では、子供たちが普段から興味をもって活用しているICTを音楽授業で活用したことで、学習意欲が飛躍的に向上した。器楽などの技能が伴わず、音楽授業に苦手意識のある児童も、「今日の音楽が楽しんだ。」「今日は音楽があるから早く学校に来たかった。」「家でもやりたいから、手順の用紙がほしい。」などの声が聞かれ、音楽室に駆け込んでくる子供の姿が多く見られた。さらに、和音の音を自分でつくって聴くこと、旋律の動きやリズム、速度によるイメージの変化へて気づきに有効であった。この実践の課題として、和音や旋律を演奏する技能を、年間指導計画の中で補充していく必要が浮かびあがった。また、ICTを活用した授業では、子供たちの意欲は高まるが、個人で活動に没頭することが多くなりがちである。その為、仲間と互いの音楽を聴いて良さを伝え合ったり、全体で一つの音楽を聴いて意見を交流したりする時間を毎時間位置づけ、仲間とかかわりながら学ぶよさを実感できるようにした。

2.2.3 考察

コロナ禍での授業実践を通して、いずれの実践も子供たちの学習意欲の高まりが見られた。音楽科の課題ではないのに、子供たちが自ら楽器をつくって授業に持参したり、家庭でもICTを活用し音楽づくりを楽しんだりする姿が見られた。学んだことを自身の音楽や生活に活用する力を身に付けたのである。また、活動を通して、自ら仲間にかかわりを求め、共に音楽を楽しもうとする姿も見られた。音楽は、自然に仲間とかかわることができる、仲間とかかわるからこそ楽しくなることを実感していったのではないだろうか。授業実践をしていく中で、歌えない、吹けない代わりに何ができるかを考えることが重要で、感染対策の授業を探索していくことではないことに気付かされた。感染対策を講じることはもちろん、コロナに関係なく、子供たちの資質・能力を育む、音楽科の本質に迫る授業を探索することが大切なのである。音楽を指導する教師として、これまでの固定観念にとらわれず、子供たちにとって何が大切かを見極めていくことが重要である。今後、感染対策を視野に入れながら、目の前の子供たちにどのような力を付けるのかを見極め、音楽科の本質に迫る授業を探索していきたい。

(平出)

2.3 三密を防ぎながらの合唱（附属新潟中学校）

2.3.1 実践の背景と意図

どの学校の音楽授業でも合唱に取り組むと言っても過言ではない。合唱で仲間と歌い合わせることを通して、一つの音楽を創り上げていく喜びを味わうことに加え、仲間の思いに触れたり、合意形成をしたりすることで特別活動の側面での効果もある。生徒が心の底から音楽に親しみ、思い切り声を出して歌う、仲間と一つの音楽を創り上げていく喜びを味わう環境をつくることができるということは、彼らにとってその空間や集団が居心地のよいものになっているからである。生徒間の状況を把握するためにも、合唱を行う価値は大いにある。しかしながら、新型コロナウイルス感染拡大に伴い、文部科学省からは「学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル～学校の新しい生活様式～」が示された。合唱は、「特にリスクの高い活動である」とされ、感染レベル3地域では「行わない」、レベル2地域では「リスクの低い活動から徐々に実施」し、「一定の距離を保ち、同じ方向を向くよう」に示されている。今まで私たちが当たり前に行ってきたような形で合唱することは困難となった。

そのような中で、「多くの制約があるから、やらない」でなく、「制約のある中でも音楽科ができること」を見だし、音楽科の資質・能力を育成していく授業を考えていく必要がある。そこで、感染拡大予防を行いながらも、仲間と声を合わせて歌うことのできる授業のあり方を考える。

2.3.2 実践

新型コロナウイルス感染拡大予防の観点から、当校の音楽科授業会場等の改善を図った（写真1, 2）。

- ① マスクを常に着用して行う
- ② 基本的には全員が一方向を向いて歌う
- ③ 歌う時は十分に間隔をあける（目安：前後左右を両手間隔にあける）
- ④ 音楽室では十分に間隔をあけることができないため、歌唱は武道場や体育館で行い、常に2方向から換気を行う。



写真1 武道場で授業を行う



写真2 実際の授業の様子

2.3.2.1 実践1 響きをつくろう：マスクを活用する

1) 題材について

題材名：響きをつくろう（中学1年）

教材：附属新潟中学校校歌（作詞：金子彦二郎 作曲：中田喜直）

2) 目標

自身の歌う姿勢、発声、発音について相互評価を基に修正していく活動を通して、校歌を響きのある歌声で歌うことができる。

3) 題材構成

- ① 楽譜を見ながら、校歌のモデル演奏を聴く活動
 - ・楽譜の見方を説明し、在校生が歌った演奏を聴く
- ② 曲の背景を知る活動
 - ・作詞者、作曲者について知る
 - ・歌詞の意味について考えたり、書かれている情景を想像したりする
- ③ 実際に歌ってみる活動
 - ・ピアノ伴奏に合わせて歌う
- ④ 「響きのある歌声」を共有する活動
 - ・「響きのある歌声」とはどのような声か、学級でイメージを共有する
 - ・「響きのある歌声」にするためには、どのような歌い方をするとよいか考え、歌う姿勢に着目する
- ⑤ 歌う姿勢を確認する活動
 - ・教科書を見ながら、歌う姿勢を実際に行う
 - ・マスクをしていることを利用した発声の確認をする
- ⑥ 歌う姿勢について相互評価し、歌い方を修正する活動
 - ・ペアになって歌う姿勢について相互評価し、改善すべきところを伝え合う
 - ・助言を受けて、自分はどのように修正するか、ワークシートに記入する

・助言を受けて、再度歌う

(その後、臨時休校になったため、休校中の課題として、校歌を覚えることを課した)

⑦ 修正した歌い方で校歌を歌う活動

4) 授業の実際

④の「響きのある歌声」を共有する活動で生徒は、「響きのある歌声」にするためには、自身の身体を効果的に使って発声できる姿勢を整えたり、息の使い方を工夫したりすることが重要であることを見いだした。小学生の時から何度も歌を歌っているが、中学校へ入学した時点で再度確認すること、変声期を迎えはじめ、今までの発声方法ではうまくいかない部分を修正する必要性を生徒がもっており、全員で足の開き方や立ち方、腹式呼吸などについて一つ一つ確認を行うこととした。

常にマスクを着用しているため、正しい発声や呼吸で歌えているか教員が生徒の口元を見て支援することは困難である。そこで、マスクをしていることで、生徒自身で実感を伴って自己評価できるよう支援をした。

例として、以下のような言葉がけを行った。

呼吸	・鼻で吸う時に、マスクが鼻にくっついてしまうくらいたっぷり吸う。吐くときには、自分の吐く息でマスクを浮かせるイメージで、長くたっぷり吐く。 ・吐いた時にたっぷり息を入れると、マスクの中は蒸れる。
発声	・響きのある歌声で歌ったり、ハミングをしたりすると、声の振動で鼻や頬に当たっているマスクが震える。
発音	・深い響きにするために縦に口を開いて歌うと、だんだんマスクが動いて下がってくる。

マスクをしているからこそ実感できるチェックポイントを示すことで、生徒は自身の呼吸、発声、発音について自分でチェックすることができた。生徒の振り返りの記述では、「声が出ていなかったの、マスクが震えるくらい出す。」「最後に歌った時、マスクがふるえて変な感じがした。力を抜き、きれいな姿勢を心がけると響きをつくることができた。」と、マスクを用いて不十分さを自覚したり、チェックポイントを参考に試行錯誤したりしながら、歌い方を工夫している生徒が多く見られた。

また、⑥歌う姿勢について相互評価し、歌い方を修正する活動では、姿勢についてのみ評価するため、距離を保ったまま行うことができる。本人は、できているつもりでも、片足に重心をかけていたり、背中が曲がっていたりすることがある。それらを客観的に見てもらうことで、歌う姿勢の修正を行うことができた。振り返りの記述で「自分では気づかなかったけれど、肩に力が入ってしまっていて固くなっているということが分かった。」と自身の姿勢の癖に気づき、修正した結果、声の響きの変化に気付いた生徒も多く見られた。

2.3.2.2 実践2 思いを込めて：隊形の工夫

1) 題材について

題材名：思いをこめて（中学3年）

教材：「花」（作詞：竹島 羽衣 作曲：滝 廉太郎）

2) 目標

発声・発音・呼吸を追求の観点に自分たちの演奏を検討し、試行することを通して、曲想と自分の思いや意図を関連付けて日本の歌曲にふさわしい歌い方を工夫することができる。

3) 追求活動の方法

曲の背景を理解し、自分たちの思いや意図を表現できるように歌い方の工夫を行っていく活動を行う。

1 グループ3～4名で2部合唱を行った。各グループの演奏が聴きやすいように、練習場所の配置について以下のように工夫した。

①グループ間の距離を十分にあげる

譜面台にグループシートを置き、距離を十分に離しておくことでグループ間の距離を保てるようにする。一方向に歌ってしまうと自グループの声が聴き取りにくくなるため、全員が外側を向いて歌い、向き合うことのないようにする。

②グループ内の距離を保つ

何度も歌い試しながら、工夫点を楽譜に書き込んでいくと、自然と譜面台の付近に生徒が密集してしまう

ため、床に立ち位置を示すラインテープを貼る。



写真3 グループ間の距離を十分にあける



写真4 床にテープで立ち位置を示す

4) 授業の実際

同じ空間で複数のグループが同時に歌うため、グループ内の声を聴き取りにくい状況ではあった。しかしながら、他グループと大きく距離をとって追求活動をすすめられたことで、仲間との対話がしやすくなり、自グループの演奏と向き合うことができた。また、追求活動に没頭するあまり、立ち位置を気にせず密集してしまうこともあったが、目安のテープがあることで、適宜自分たちで間隔をチェックし、修正しながら歌う様子も見られた。

また、学習の振り返りでは、以下のような記述がみられた。

- ・マスクをしていて、声が聴き手に届きにくくなってしまうので、腹式呼吸や口の開き方、発音などいつもよりもはっきりさせることが大切だと思った。
- ・マスクで顔があまり見えないけれど、アイコンタクトをしたり、仲間の声を聴いたりしながら合わせることができた。

マスクをしていることで、相手の声が聴き取りにくくなっていること、口元の動きが見えないことなど仲間と合わせる時にやりにくい部分が見られた。しかしながら、それを補うように、自身の歌い方について再度確認したり、相手に伝えるという視点をもって歌い方を工夫したりする姿が見られた。そのようにすることで、口元だけ動かして歌っていた生徒も、相手に声が届くように普段よりも大きく口を開いて歌ったり、アイコンタクトやブレスのタイミングに着目して歌ったりすることができた。

2.3.3 考察

感染予防のため、マスクの着用は必須である。歌う時に口元を覆うものがあると、息苦しさを感じたり、聴いている相手に声が届きにくくなったりした。また、距離を保ちながら歌うことで、普段は隣にいる仲間の声を聴くことができたが、聴き取りにくくなった。歌いにくさは多々あるが、この状況下で歌うことで、今までよりも自分の声をじっくり聴くことができた。自分の歌い方と向き合ったり、相手に伝わる歌い方を考えたりして、生徒は「歌うこと」についてもう一度自身の考えをとらえ直す機会となった。

課題として、授業者が一人一人の歌唱の様子を聴き取ったり、視覚的に見取ったりすることが難しいことが挙げられる。マスクを用いて自己評価させることはできるが、授業者が生徒一人一人の現状を把握して、具体的な口の開き方等について助言しにくい。そのような点からも今とは異なる視点で授業を展開していく必要がある。歌唱の評価をどのようにするのか、については授業でどんな資質・能力を育成していくのかを授業者が今まで以上に明らかにして、何を指導していくのか吟味する必要がある。

(和田)

2.4 今こそ音楽科教育の「当たり前」を問う（附属長岡中学校）

2.4.1 実践の背景と意図

新型コロナウイルスの感染拡大を防ぐために、「三密の回避」「楽器の共用の不可」「マスク着用や手指の消毒」の徹底が必要となり、「歌唱」「器楽」といった表現の活動が「当たり前」であった音楽科の学習に多くの制限ができた。それに伴い、この制限下で「歌唱」「器楽」といった「当たり前」に変わる、実施可能な音楽科の題材や教材を開発することが急務であった。

一方、コロナ禍で私たちの音楽活動自体ができなくなったかと言えば、決してそうではなかった。確かに、音楽の授業が制限されただけでなく、卒業式や入学式では、マスクを着用した上で国歌や校歌の歌唱であったり、式次第そのものから割愛されたりするなど、学校教育の中で集まって歌唱をするといったある種の音楽活動は制限された。しかし、YouTube上ではピコ太郎による《PPAP》の手洗い動画、星野源による《うちで踊ろう》といった、音楽の発信と発展、共有が見られたり、コロナ禍で外出制限をされているイタリアの人々が自分たちの音楽を自由に歌い合い、互いを勇気づける場面が見られたりした。むしろ、この状況下で、音楽が人々を繋いだり、形を変えながら共有されたり、表現し合うことによって勇気づけたりする側面が強調されたと言える。

そこで考えさせられることは、私たちが取り組んできた「歌唱」や「器楽」の授業は、本当に音楽科教育の「当たり前」の姿なのだろうかということである。もしかすると、既成の楽曲を歌ったり演奏したりすることを「当たり前」と思っていたがために、見落としてきた音楽の姿があるのかもしれない。現に、先のYouTubeで見ることができた音楽は、既成の楽曲を表現するものではなく、自由に生み出し、発信、発展し、共有されている音楽であり、先の音楽科教育の「当たり前」の姿とは一線を画するものである。そして、こうした音楽科教育に対する「当たり前」に対する気付きと考察は、単にこのコロナ禍を乗り越えるものとしてではなく、音楽科教育のこれからの展望も含まれなくてはならない。

これらのことを鑑み、以下の実践の項では当校音楽科教育の「当たり前」を問い直し、これまで気付かなかった、もしくは見落としてきた音楽の姿に迫るための取組を紹介する。

2.4.2 実践

2.4.2.1 実践1 わたしにとっての音楽とは（4月）

1) 概要

① ねらい

新型コロナウイルスによる外出自粛要請下での私たちや周囲の人々の音や音楽との関わり方を見つめると同時に、諸外国の人々の音や音楽との関わりについて知ることを通し、「わたしにとっての『音楽』」について考える。

② 対象 中学校全学年

③ 条件 マスクの着用、換気、手指の消毒、動画の視聴ができること

④ 教材 ・ピコ太郎《PPAP》手洗いバージョンのもの ・星野源《うちで踊ろう》 ・イタリアの人々の様子 ※いずれも YouTube 動画から

⑤ 展開

表 題材「わたしにとっての音楽とは」の学習展開

○学習内容 ・学習活動	※備考
○休校期間中（2～3月）の音楽活動の振り返り ・休校期間中の自分の音楽活動を仲間と伝え合う。	※音楽活動が難しい中でも、音楽をしようとしていたことに気付かせたい。また、私たちの多くは音楽の「受け手」であったことにも触れたい。
○ピコ太郎《PPAP》、星野源《うちで踊ろう》の紹介 ・動画を示し、どんな内容の音楽を、どんな方法で、何の目的で発信したのかについて考える。 ・私たちの音楽活動との違いを考える。	※ピコ太郎、星野源は音楽の「発信者」「協働者」と言える。
○イタリアの人々の様子の紹介・動画を示し、どんな内容の音楽を、どんな方法で、何の目的で発信したのかについて考える。 ・私たちの音楽活動との違いを考える。	※イタリアの人々が自分たちの音楽を思い思いに歌い合い、聴き合い、合わせ、称え合う姿について触れさせたい。 ※楽器がなくても、フライパンなどの日用品で音楽しようとする姿にも気づかせたい。
○「わたしにとっての音楽とは」の記述 ・上の内容を踏まえて、「私にとって音楽はどのような価値があるものなのか」について考え、記述する。	

2) 實際

① 使用したスライドの例

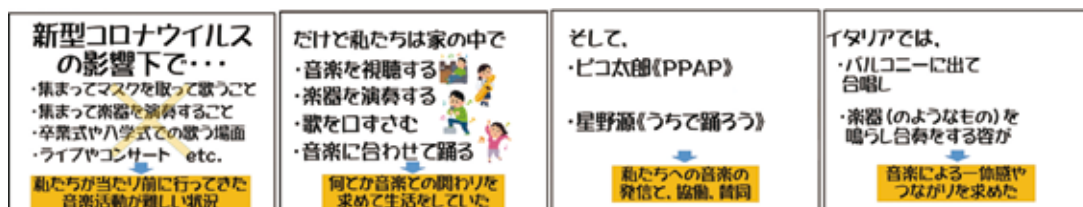


図1 題材「わたしにとっての音楽とは」で使用したスライド例

② 生徒の振り返りの一部紹介

- ・僕たちが見たイタリアの動画でも普通の人々が音楽を通じて逆境に立ち向かおうとする姿がありました。今の私たちにはそういう関わりは少ないけれど、大切なことだと感じました。
- ・自分はどちらかというところ「受け手側」にいることが多いと感じています。Youtubeで好きなメロディや好きな歌詞を見付けたりすることが楽しいです。

3) 成果

1 時間の授業であり、生徒の変容を分析するような追跡調査ができていないわけではないが、今までの音楽との関わりを見つめ直した振り返りや、諸外国の人々や YouTube で音楽を発信する人々の様子について考えを述べた振り返りから、これまで当たり前であった音楽との関わりについて改めて向き合う様相が見られたことは成果であった。

2.4.2.2 実践2 わたしの音楽活動（5月）（休校期間中の課題として提示）

1) 概要

① ねらい

5月の休校期間中に、実際に生徒が行った音楽活動をレポートにまとめ、4月に取り組んだ題材「私にとっての音楽とは」との関連を考えたり、音楽活動そのものの意味を追求したりする。

② 对象 中学校全学年

③ 条件 ZOOMの接続環境（生徒からの質問を受け付けたり、やり取りから行った音楽活動の価値を見出したりするために使用した。）

④ 教材 実際のやり取りから作成したスライド

2) 實際

① 使用したスライドの例





図2 題材「わたしの音楽活動」で使用したスライド例

3) 成果

「○○をきなさい」といった「課題」ではなくとも、主体的に音楽との関係を求めていこうとする姿が、レポートやZOOMのやり取りから見られた。さらに、4月に実践した題材「わたしにとっての音楽」との関連を見出し、記述する生徒もいた。この課題を通し、コロナ禍で改めて音楽の力や役割、自分にとっての価値を追求しようとする姿を見ることができた。

2.4.2.3 実践3 わたしのあげたい花火

1) 概要

① ねらい

花火が打ちあがり夜空に開く映像から、一人一人がリズムをつくり、仲間と重ねたり繋げたりしたり、音色を選んだりする学習を行った。ここでのねらいは以下である。

- ・思いや意図をもってリズムを生み出すこと
- ・生み出したリズムを仲間と重ねたり、繋げたりしながら、新たに生まれる音楽の面白さや構成のよさに気付くこと
- ・表現したい花火の様相に迫るために、自分の身体や日用品から音色を見つけ出すこと

② 対象 中学校全学年

③ 条件 マスクの着用、換気、手指の消毒、楽器（日用品）の共用の禁止

④ 教材 《花火》（作曲／山田俊之）の4小節モチーフ、教師が創作したリズムと譜ボディパーカッションや日用品を用いたリズムアンサンブルの動画

⑤ 題材の構成

時	○学習内容 ・学習活動	※備考
1	○リズムで遊ぼう※ ・リズムで会話 ・相手のリズムを少し真似して会話 ○《花火》（作曲／山田俊之）に挑戦 ・ユニゾンで ・ずらしてスタート ○《花火》からどんな「花火」をイメージしたかな？ ○「わたしが上げたい花火」のイラストを描こう	※相手のリズムモチーフを真似をするなど、モチーフを関連させながら楽曲を構成することのよさをスモールステップで体験させたい。
2	○リズムで遊ぼう※ ・リズムで会話 ・会話を終わらせるには ○イラストをもとにリズムをつくろう※ ○つくったリズムを叩いてみよう	※ここで、終止感のつくり方を体験させたい。 ※西洋音楽の記譜方法にこだわらず、口唱歌や簡易的な記譜方法も示す。

② 生徒のレポートの一部紹介

・休校中で、コロナが不安だったので、家でYoutubeで音楽を聴いていました。そして「おかあさんといっしょ」に出演していた人たちでアップされた動画や「アニー」に出演していた人たちでアップされた動画があって、とても明るい気持ちになりました。

・どこかの国の警察官がギターを弾いて、コロナウイルスで不安な人たちを元気づける動画を見ました。あと、手洗いの歌が、日本にも海外にもいっぱいあって驚きました。あと、時間があったので自分でも歌ったりギターに挑戦したりしました。

3	<p>○つくったリズムで遊ぼう※</p> <ul style="list-style-type: none"> ・相手に聴いてもらう ・班の仲間と繋げてみる ・仲間と重ねてみる <p>○つくったリズムで仲間と花火のリズムアンサンブルを考えよう</p> <p>○どんな音色だともっと楽しくなるかな？※</p>	<p>※遊ぶ活動を通して、自分のリズムの習得や、仲間のリズムの理解を促したい。</p> <p>※日用品を使用する旨を伝える。</p>
4	<p>○つくったリズムアンサンブルを練習しよう</p> <p>○音色を工夫してみよう</p>	※参考動画を示す
5	○発表会と振り返り	※3密を防ぎながら、校園の園児や小学生を招いた発表会を行いたい

2) 実際

① 生徒の様子

第1時では、「リズムで遊ぼう」という学習内容で、四分の四拍子1小節のリズムを即興的につくり、掛け合う活動をした。その掛け合いを「会話」に見立て、「相手の言っていること（リズム）を真似したり（反復）、変えてみたりして（変化）返してみよう」や「4小節目で会話を締めくくめるように終わり感を出してみよう（終止）」といった条件を加えながら学習をした。生徒は加えられた条件を受け、自分なりに反復や変化、終止感を表現しようとしていた。時に、「今は終わり感が分かった」や「変化させたね」といった会話で確認する様子も見られた。その後《花火》を題材にしたボディパーカッションに取り組み、音色やテクスチュアの工夫によるおもしろさや演奏のよさの違いを感じ取ったり、音楽から想起されるイラストを考えたりした。



写真1 リズムで会話をする

第2時では、第1時で作成したイラストから想起されるリズムを、実際に手やひざを叩きながら創作する活動を行った。生徒は私が上げたい花火の映像と、そこから聞こえてくるであろう花火の音を想像しながらリズム創作に取り組んでいた。時に、表現したいリズムの記譜法を知りたいと考え、教師に質問をしたり、仲間に評価してもらったりしながら納得のいくリズムに迫る様相が見られた。また、リズムを創作した生徒から、そのリズムになった意図や表現したい思いを説明する文章の記述に取り組んだ。それぞれの音符や休符に込められた意味や役割を、表現したい花火の様相と関連させようと、思考を深める様子が見られた。



写真2 イラストとリズム創作を関連させる

第3時では、第2時で作成したリズムで仲間と繋げたり、重ねたりしながら16小節のリズムアンサンブルを創作する活動を行った。ペアの生徒に創作リズムを発表したり、繋げたり、重ねたりしながら、偶然生まれるリズムの面白さや表現のよさを十分に感じ取った後、4人グループで、創作したリズムを構成した。偶然生まれるリズムのよさを生かそうとするグループや、おおよその構成を相談して決定し、それぞれの創作リズムの特徴を生かしながら創作しようとするグループなど、色々な方法でリズムアンサンブルを創作する様子が見られた。また、終止感を表すために、最後のリズムを新たに創作するグループもあった。リズムアンサンブルが決定したグループから練習に取り組んだり、音色について相談したりした。



写真3 アンサンブルを創作する

第4時では、創作したリズムアンサンブルの練習をしたり、楽曲にあう音色を追求したりする活動を行った。意図した表現ができたり、タイミングが揃ったりした時には、グループ内で拍手して喜ぶなど、創作する喜びを共有する様子が見られた。また、音色を追求する場面では、「このリズムを目立たせたいから、硬くてはっきりとした音色がいいね」などと、楽曲に合う音色について話し合う様子が見られた。どの生徒も次時の幼稚園児を対象にした発表会に向けて、よりよい表現を目指していた。



写真4 楽曲に合う音色を追求する

第5時では、幼稚園児に向けて発表会を行った。手指消毒とマスクの着用、換気と空気循環など、新型コロナウイルス感染対策を十分に行って実施された。それぞれのグループの発表前に工夫点や聴きどころなどを紹介して行った。園児たちは生徒の表現を見ながら手を叩いたり、身体を揺らしたりしながら聴いていた。そうした様子に生徒たちは創作したリズムやリズムアンサンブルで楽しむ相手の存在を実感し、喜ぶ様子も見られた。



写真5 園児の前で発表する

② 生徒の振り返りの一部紹介

- ・自分のリズムだけでは何だかぱっとしない感じがしていましたが、4人でリズムを聴き合って、組み合わせを考えることで、どんどん面白くなってきました。
- ・音楽をつくることをあまりしたことがありませんでしたが、やってみるといろいろなアイデアが生まれて楽しかったです。
- ・繰り返すことや重ねること、終わり感を考えたり盛り上げたりすることは、他の曲でもあることなので、色々な作曲家も同じようにして考えているんだなと思いました。

3) 成果

生徒の学習の様子や、振り返りから、音楽をつくる楽しさや喜び、意欲、そして音楽で他者と繋がる価値に迫ることができたのではないかと感じている。そして、こうした成果は音楽の創作ならではのものであると同時に、「終止感」や「反復」「変化」「テクスチュア」などといった創作の視点は、他の楽曲の表現や鑑賞への転移を期待できるものである。

また、音楽の授業や音楽配信、動画、CDなどから受け取る楽曲の殆どは、吟味に吟味を重ねた「世に出て恥ずかしくない」とされている、いわば完成された楽曲であるが、それぞれの楽曲には完成に至るプロセスがあったり、楽曲を生み出す着想点があったりすることに気付くような振り返りもあった。

本題材の次に、《夏の思い出》や《浜辺の歌》の（マスク着用で3密を避けた上での）歌唱や《魔王》や《交響曲第5番》の鑑賞に取り組んだが、「わたしが上げたい花火」の視点から、それぞれの作曲者がどのような所に着想を得て音楽をつくっているのか、そしてどのように楽曲を構成しているのか、楽曲の終止感をどのようにしているのかについて、自身の創作の学習と関連付けながら学ぶ様相が見られるなどの成果が見られた。

2.4.3 考察

以上、3つの実践を紹介した。それぞれの実践はいずれも、既成の楽曲を「歌う」「演奏する」といったこれまでの「当たり前」の音楽科の学習とは一線を画している。しかし、これら実践から見えてくる生徒の実際の姿は、「生活や社会の中の音や音楽の働き」を見つめようとするものであり、音楽を創造することの楽しさや喜び、そこから感じ取られる価値を学ぼうとするものであったと考えている。これら成果は、これまでの「当たり前」の学習を踏襲することでは得られないものであり、このコロナ禍の今だからこそ見つけ

直したり、考え直したりするものである。

(吉村)

3 全体考察

4人の附属学校教員の実践を本稿のねらいに照らし合わせ、音楽教育上の意味を考察する。その際、コロナ禍の学校教育の下で、いったい何がなされ、何に気付かされたのか、を整理しつつ、そこに何が問われていたのか、を浮かび上がらせることが肝要と考える。そこから学校の音楽教育の現状と課題を明らかにするとともに、今後の方向性について示唆を得たい。

1) 「当たり前」の問い直しから生まれる新たな可能性

すべての実践の前提に共通して見られたのは、「当たり前」の問い直しであり、そこから生み出される音楽科の新たな可能性である。コロナウイルス感染症対策が強く求められ、時に臨時休校も要請される中で、それまで日常的に実践され、当たり前にあった学校の音楽授業、音楽活動は一変した。音楽室で日常的に行われてきた歌う活動やリコーダーなどの楽器演奏が困難になった時に考えざるを得なかったのが、そうした活動そのものの本来の意味である。この意味において、コロナウイルス感染症は音楽教育の日常に鋭く問いを突き付けたといえる。

臨時休校、分散登校、対面・非対面の授業といった現状の中で、これまでの「当たり前」への問い直しをすることで、それぞれの教師は思考し、音楽授業の存在価値について自身の考えを整理したり、認識を新たにしたりしている。そこに通底するのは、「音楽をすることをあきらめない」という強い思いと、どのような状況下でも音楽をすることが可能であり、そこに音楽があるという考え方である。

・米山は、分散登校で会えない友達へ子供たちが残した黒板のメッセージなどから、「音楽を通したつながり」や「みんなで学ぶ」ことの大切さを再認識し、その価値に気づき、「音や音楽でつながる」ことを授業研究のテーマにしていこう。

・平出は、固定観念を覆し、発想の転換が必要であるとし、「身に付けたい資質・能力を育む」といった視点に立ち、サウンドスケープを核とした題材開発に取り組んでいく。そして、これらの作業が「子供たちにとってどのような力を付けるのかを見極め、音楽科の本質に迫る授業」の探索であり、「感染対策の授業を探索していくことではないこと」に気付いていったと述べる。

・和田は、「当たり前に行ってきたような形で合唱すること」が困難になった中で、「制約のある中でも音楽科ができること」を視点に、コロナ禍においても仲間と声を合わせて歌うことのできる授業のあり方を模索した。新たな環境と授業形態を作り出す中で、声を合わせて歌うことの方法論と本質的な意味を見出していく。

・吉村は、「既成の楽曲を歌ったり演奏したりする」ことを「当たり前」と思っていたために「見落としていた音楽の姿があるかもしれない」と考え、自由に生み出し、発信し、共有されているコロナ禍の下での音楽や音楽家の有り様に着目し、そこから授業の構想を発想、実践を通して音楽本来の姿や授業の有り様に迫るための取組を提案する。

2) 子供とつながり、学びを継続させるオンライン学習の開発とICTの活用

米山の実践1では、休校中の子供たちに対して、学びを継続させるオンライン学習の開発がなされた。ここでは、「ロイロノートアプリの『送る』『提出』『返却』などの機能を使いながら、教師と子供との間で、テキストや動画などのコンテンツをやりとりし、「Zoomアプリの様々な機能を使い、ライブで教師と子供、または子供と子供のface to faceのやりとり」がおこなわれている。アプリを用いた子供の作品提出に対して、コメントを返却し評価する中で、子供の工夫の価値付けがなされた。ICTを用いたオンライン学習における授業の基本的な構造が提案されたと言えよう。

3) 学校(対面)～家庭(オンライン)を一元化したハイブリッドな学びの形態と授業の探究

臨時休校、分散登校は、結果的に学校での音楽授業と家庭での音楽学習といった二つの学習の場を生み出した。実践から見えてくるのは、この二つの場を単に独立したものとは考えず、それらをどのように結びつけるか、という模索である。そこには、「教科書の曲についての調べ学習」「鑑賞教材を聴き、感想を書く」といった類の課題に対する、「本当に子供たちにとって必要なのか」「自立した学び手を育てているのか」(米

山)といった問題意識が存在する。

米山の実践2では、「オンライン学習と対面学習のよさを生かして組み合わせること」を重視し、二つの場を結びつける。前者では、ロイロノートのカメラ機能を使った教師の模範演奏の動画配信、子供からは家庭学習の録音動画の送信、それに対するコメントの送信、演奏に対する思考ツールの活用、後者では、比較聴取を生かしたグループでの話し合いやパートの役割に合わせた楽器選択の相談や合奏などがあげられる。

吉村の実践1と実践2では、学校における実践1「わたしにとっての音楽とは」で学習した内容を休校中の実践課題である実践2「わたしの音楽活動」へと意識的に結びつけている。音楽と人間との関わり方を学び、音楽の価値について考えたことを、家庭や日常における自身の音楽行動に結びつけようとする試みである。

なおこの際、米山実践に見られるように、オンライン授業により、個々の学習者が教師のアドバイスを得ながら、自分のペースで学びを進めることができたということも特筆すべき成果として記しておきたい。

このような試みは、今後、オンライン学習と対面学習のあり方や関係性、学校での音楽学習と日常性との結びつきといった点から、音楽授業を見つめ直す好材料となっていくものと思われる。

4) 身体に問う～身体で聴く、身体に訊く、身体でつながることへの着目

ICTを活用した授業が提案される一方で、あらためて身体性に着目し、音楽と身体との関係を問い直したことも注目される。

和田の実践1, 2では、「特にリスクの高い活動」とされた合唱に対して、「制約のある中でも音楽科ができること」を見出し、「仲間と声を合わせて歌う」授業のあり方を模索する。密集、密閉、密接のいわゆる三密を避けるために授業の場を音楽室から武道場へ移し、距離を保ち、マスクを着用した声の授業を行った。ここで注目されるのは、敢えてマスクをすること、小グループでの練習、グループ練習では距離を保ち外側を向く、といったように、感染予防策を逆手にとり、学びの方策としたことにある。マスクをして発声することにより、これまで気付きにくかった呼吸や発声、発音の状況を生徒自身が実感を伴って把握したり、グループ練習では、仲間の声を意識しアイコンタクトやブレスのタイミングに着目して歌ったりする活動が生まれている。これまでの学習方法では気付くことのなかった「声を合わせて歌うこと」における自身や仲間に対する身体への着目と身体でつながることが新たな意味をもって浮かび上がってくる。

一方、平出の実践1では、サウンドスケープを生かした音楽づくりがテーマとなっている。授業の場は、三密の成立しない普段の遊び場「附属100年の森」である。森の中で行われる音の探索は、音楽室での聴覚中心の音の世界を拡大させる。全方向から聞こえてくる音に対して、子供たちは、例えば空を飛ぶ飛行機の音のような、あるいは肌に感じる風のような聞こえない音も含めて、全ての感覚を総動員して耳を澄まして聴いていく。そしてこの実践で重要なのは、こうした身体的経験を整理し、音や音楽の創出につなげていくことにある。

5) 音楽への関わり方の再考～子供が音楽を「すること」への着目と音楽の行為や場の拡がり

従来の「歌を歌う」「楽器を演奏する」「つくる」「聴く」といった基本的な枠組みや視点にとらわれず、子供と音楽との関わり方、関係性のあり方を再考し、それを核に授業を構想する姿も見られた。

米山実践2では、「日々の授業の中で技能を重視するあまり、リコーダーができること、合唱をすることが第一主義になっていなかったか」といった問題意識の中で、「子供目線で考える」授業の再構築をオンライン学習において試みている。そこでは「子供や興味や、やる気をもてること」「子供が友達と関わり合いながら学ぶこと」「子供が必要に応じて学習の相談をできること」を大切にし、動画資料の送付や録画動画の受け取り、コメント機能を活用したアドバイスや評価を積極的に行っている。「相談」という用語に反映されるように、教師が指導し「できること」を重視した授業から主体的で協働的な学びのプロセスや音楽を「すること」を大切にした授業へ視線を移しているということが出来る。

さらに、吉村実践、平出実践からは、こうしたプロセスや音楽行為そのものを、「発信」「交流」といった枠組みまで抱き込もうとする発想を見ることができる。すなわち吉村実践の1から2への連続性は、1における学びを2において生徒自身の音楽活動へと発展させる試みであり、実践3の第5時では、創作したリズムアンサンブルを幼稚園児に発表し音楽による交流へとつなげている。また、平出実践1では、題材の最終場面で「森のコンサート」を計画し、音楽の場を森という生活空間に広げるとともに「他のクラスの子供や校庭で遊んでいる幼稚園の子供たちも耳をすませ」るコンサートとして結実させている。

これらの実践から言えるのは、子供自身が音楽を自分事と捉え、教師の「指導」よりも「支援」を得ながら学ぶ姿勢が顕著であること、音楽室を難なく飛び越え、生活空間に学びの場を拡大し、発信、交流する一連の流れと行為の全体が音楽をすることであり学ぶことである、といった授業観、学習観の存在である。

6) 受け手から発進する側への転換

上記の事実は、音楽の授業の中における学習者の立ち位置の転換を意味するものと考えられる。すなわち、受け手（指導される者）から発信者（学ぶ主体）へ、既成の楽曲の再現や価値付けられた楽曲の理解者の側から自ら創造する側へ、そして、音楽の受容者から音楽によるコミュニケーションの主体者へとといった方向へ授業の舵を大きく切ろうとするものである。

7) 自立的な学びと協働

コロナ禍の下、休校を余儀なくされる子供たちやその子たちに向けた課題の作成が急務とされる中で、あるいは歌うことや演奏することの制限が強要される授業を考える中で、さらには予想もしなかった遠隔システムによる授業を実施せざるを得ない中で、突然突き付けられたのは、「教え子は確かに育っていたのか」、「彼等は音楽的に自立していたか」という問いと疑問符であった。例えば、吉村実践の題材「わたしにとっての音楽とは」「わたしの音楽活動」「わたしのあげたい火花」などのように「わたし」へのこだわり、あるいは、平出実践の生活の音や環境へのまなざし、Chrome Music Labを使用した個による音楽づくり、などはこのことを如実に表している。また、米山実践のオンライン授業のように、個々の児童が自分のペースで学習を進め、個の学びを熟成させることが可能になったことも「わたし」の学びの成果として捉えることができる。

こうした実践の最終的なねらいは、米山が「子供たちの音楽的自立を念頭に授業を行っていく」と述べるように、個の音楽的自立、つまりは、音楽の学びと実践の一人歩きを目指しているものと考えられる。そこで期待されているのは、子供たちがそれぞれ当事者意識をもって自立的に音楽をすること、音楽により様々なモノやコトと交流すること、である。重要なのは、そしてこれらの実践に共通するのは、このことを他者との対話と協働により実現していこうという発想とそれに基づいた実践であることだ。

4 おわりに～展望

平成29年改訂の学習指導要領においては、「予測困難な時代に、一人一人が未来の創り手となる」ことが期待されており、そのために「生きる力」すなわち「変化の激しいこれからの社会を生きていくために必要な資質・能力」の育成はますます重要視されている（中教審答申2016）。新型コロナウイルス感染症がもたらしたさまざまな状況は、まさに現代が「予測困難な時代」であることを強く印象づけた。臨時休校により自宅待機を要請された子供たちにとっては、まさにこの「生きる力」の応用問題が突然課されたわけである。また、皮肉なことに、教師にとっては、教え子に「生きる力」を育成してきたか試された場でもあったと言える。

この時期、文部科学省(2020.5.7)は「子供の学び応援サイト」において次のような内容を工夫例として提案している。以下は中学校のもの（一部）である。多くの学校においてこれを基にした課題が作成されたことは、想像に難くない。

既習曲の楽譜を見返し、音楽に関する用語や記号について、教科書等を参考にしながら読み方や意味などを確認するとともに、実際に歌ったり演奏したりする際、その用語や記号を意識することによって、どのような気持ちになったり演奏上の効果があったりしたのか、ということについてノートにまとめてみる。

この際、こうした課題が子供たちの生きる力につながったのかどうかは検討されなければならない。何故なら、この工夫例は、予測困難な時代に生きる力を育成するために必要とされた資質・能力そのものを具現化している学習指導要領音楽科の内容そのものだからである。

ここに一つの実践例を紹介したい。「器楽学習におけるモニタリング自己調整法」と題した東京都三宅村立三宅小学校教諭中村亮太のプランである（資料2）。本プランは、ねらいにある通り「器楽演奏の練習の見通しをもち、自己調整的に練習を進める習慣を身に付ける」ことにある。学習者自身が主体となり、音楽

の学びを自己調整しながら推進していく能力の育成を目指している。その構成は「録音完了」「がんばる」「あとでやる」といったきわめてシンプルなものであるが、一人一人の子供が自分のめあてを持ち課題を設定し取り組んでいくように構成されている。その際、必要に応じて情報を得ながら自身の学びの状況をメタ認知し、友達と交流しつつ、自分の計画として実践を継続できる仕組みを整えている。音楽活動を自分事として捉え、自立的に学ぶ能力を育成しようとするものである。おそらくこうした能力、すなわち、「どのように学ぶか」、そのために「どういう学びの方法があるのか」、そして「やってみよう」という意欲が学習者に備わっていないかぎり、先の「子供の学び応援サイト」における課題は、単なる学校の宿題で終わってしまい、意味のある学びとはなり得ない。というより、課題設定の発想そのものが異なっているのである。これからの音楽科教育にとって重要なのは、子供自身が当事者意識をもって自立的に音楽に関わっていくことのできる能力の育成であり、そうした能力を育成するための音楽教育の枠組みや方法論の模索である。本論で展開された実践は、このような方向性を志向したものと捉えることができる。

このように考えた時、3章で検討し浮上してきた「生活空間に学びの場を拡大し、発信、交流する一連の流れと行為の全体が音楽をすることであり学ぶことである」といった授業観、学習観や「身体性の問い直し」、「一元化したハイブリッドな学び」、「自立的な学びと協働」といった捉えは、これまでの音楽科教育を問い直し、新たなパラダイムを導き出すための有益な示唆となり得る。その際、問い直し、検討される内容としては、次のようなものが上げられるだろう。

- ・ 既成楽曲の再現性や理解を重視した学び
- ・ 音楽の「受け手」としての学習者のあり方
- ・ 身体性の意味と位置づけ
- ・ 音楽と音楽以外、学校と地域、学校と家庭、学校音楽と生活の音楽といった二項対立的捉え
- ・ 知覚と感受、構造と曲想、表現と鑑賞といった二元論的発想
- ・ 西洋対非西洋、人間対自然、伝統と現代、身体とテクノロジーといった近代二分法

(伊野)

【引用・参考文献】

- ・ 中央教育審議会答申第197号(2016.12.21)「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策等について」
- ・ 文部科学省(2020.3.24)文部科学省通知「令和2年度における小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校における教育活動の再開について」
- ・ 文部科学省(2020.4.10)文部科学省通知「新型コロナウイルス感染症対策のための臨時休校等に伴い学校に登校できない児童生徒の学習指導等について」
- ・ 文部科学省(2020.5.2)「学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル～学校の新しい生活様式～」2020年5月2日 Ver.1, 8月6日 Ver.3
- ・ 文部科学省(2020.5.7)「子供の学び応援サイト～学習支援コンテンツポータルサイト」
https://www.mext.go.jp/a_menu/ikusei/gakusyushien/index_00001.htm 2020.10.1アクセス
- ・ 新潟市教育委員会(2020.3.27)「新潟市立学校園 学校園再開に向けたガイドライン」
- ・ 日本音楽教育学会ホームページ「新型コロナウイルス感染症 音楽教育に関わる情報」ウェブサイト
<https://info.onkyou.com> 2020.10.9アクセス
- ・ 毛利嘉孝編著(2017)『アフターミュージッキング実践する音楽ー』東京藝術大学出版会
- ・ R.マリー・シェーファー著、鳥越けい子・小川博司・庄野泰子・田中直子・若尾裕訳(1986)『世界の調律 サウンドスケープとはなにか』平凡社
- ・ R.マリー・シェーファー著、鳥越けい子・若尾裕・今田匡彦訳(1992)『サウンド・エデュケーション』春秋社

【映像等資料】

- ・ PIKOTARO (ピコ太郎) (2020) 《PPAP ～ 2020 ～》 PIKOTARO OFFICIAL CHANNEL
https://www.youtube.com/watch?v=WKfolJv6Kx8 2020.4.8 アクセス
- ・ 星野源《うちで踊ろう》https://www.youtube.com/watch?v=b4DeMn_TtF4 2020.3.24 アクセス
- ・ BBC News Japan https://www.youtube.com/watch?v=Loo4XmfdRj8 2020.3.24 アクセス
- ・ 毎日新聞 https://www.youtube.com/watch?v=Cj9o2a4jvpM 2020.3.24 アクセス

資料1

プラン一覧 令和2年5月13日版				
プラン名	分類・ICV等	対象	担任	
①休学中の課題				
音楽科チャレンジ課題	歌・器・楽譜づくり・リズム	小1～5	平出	
附属小学校チャレンジ (Fチャレ)	歌・器・音楽づくり・楽譜作成	小1～5	渡辺	
私の音楽活動	レポート	中学校	吉村	
私の花火を打ち上げよう	制作・zoom	中学校	吉村	
自分の登場したい時に流したいリズムをつくらう！	ガレージバンド・ロイロノート	中学校2,3	入村	
自分の好きな曲について知ろう！伝えよう！	ロイロノート	中学校	入村	
うちで踊ろう	歌・器・器・youtube	小～高	伊野	
②三校対象アイデア				
歌に合わせてリズムで遊ぼうー「歌のリズム」ー	音楽づくり・ボディパーカッション	小2	平出	
始にのってリズムをつくろう	リズム・即興的	小2,3,4	渡辺	
始にのってリズムをかんじよう	リズムづくり	小4	栗山	
「41」の友の「フーガ」ー鑑賞「世界の国のフーガ」よりー	ボイスアンサンブル	小4	渡辺	
和音に合わせて旋律をつくろう	旋律づくり・chrome music lab	小5,6	平出	
私が聴きたい音楽をアルバム	音楽づくり・chrome music lab	小5,6	渡辺	
和音の響きを感じ取ろう	ハーモニー・マスク	小6	佐藤	
響きをつくろう	歌唱・合唱	中学校1	和田	
新型コロナウイルスの中で	生活と社会・youtube	中学校	吉村	
リズムで会話をしよう	リズム・器楽・マスク	中学校	吉村	
Zoomを使って日本語の音（おん）の響きを楽しまよう	音楽・zoom	小・中・高	伊野	
Zoomを使って日本語の音（おん）の響きを楽しまよう	zoom・音楽づくり（制作）	小・中・高	伊野	
外に出よう。耳を澄ませよう	サウンドスケープ・音楽づくり（制作）	小・中・高	伊野	
③連携システム				
Zoomでわらべうた	掛け合い・zoom	小1,2	伊野	
「うさぎ」で掛け合い	掛け合い・zoom	小3	伊野	
いろいろなリズムを感じ取ろう	音楽づくり・タブレット・ロイロノート	小	栗山	
自分の好きな曲について知ろう！伝えよう！	zoom・ロイロノート	中学校3	入村	

* 佐藤：新潟市立鏡小中学校教員 佐藤史人

資料2

音楽練習におけるモニタリング自己調整法

全学年 いっでもできる 音楽練習のアイデア

新潟県三宅村立三宅小学校
教員 中村 俊夫

- ねらい
 - 音楽練習の練習の見直しをもち、自己調整的に練習を進める習慣を身に付ける。
 - 自身の進捗を振り返り、言語化することによって、適応できるようにする。

2 手立ての整理

- 単元の流れを意識しつつ、その時間の自分のあてを具体的に持つ。
- 自分のあてを言語化したり、友達と共有したりすることで、進捗のつながりをもつ。
- フレーズごとにカードを分けることによって、練習の質向上につなげる。
- 自身の進捗を確認することで、高次の学習を促す。
- 同じ練習シートを継続して使うことで、自身の学びの履歴に残す。
- 「マイカラーのカード」として、自身の学びの履歴を言語化して残す。



- 3 効果
 - 練習のペースが、マイカラー、音楽合奏だけでなく、どの学年でも活用可能
 - 各校中の学習課題としても活用している。

4 効果

低学年のある児童は「がんばる」枠に入れたカードに、その日の進捗状況を記入して自分の進捗を確認する様子も見られた。その学年後半には「がんばる」枠に入れたカードに、その日の進捗状況を記入して自分の進捗を確認する様子も見られた。中学年のある児童は「練習だ」として「がんばる」枠に入れたカードに、その日の進捗状況を記入して自分の進捗を確認する様子も見られた。高学年では、一枚のカードを二枚にして、難しいフレーズを細分化して練習する児童がいた。練習中には、自分の進捗を確認する様子も見られた。